ISSN 1346-6801

# 九州大学総合研究博物館ニュース

March 2008 No.10

## 総合研究博物館　旧工学部本館へ移転

多 田 内 修

旧工学部本館４階の第２会議室と青山熊治画伯の壁画

総合研究博物館は、平成１２年４月の創設以来、大学と社会を結ぶ窓口として大学の教育と研究を社会に発信し、大学への理解と支援を求める活動を行ってきました。学内に蓄積されている学術標本は740万点を超え、国内随一の規模ですが、キャンパスが移転中であるため、博物館はこれまでまとまった施設を持たず、標本を整理し、教育・研究への活用を計る場や、展示を行う場を外部の施設に頼らざるを得ませんでした。

平成１９年、キャンパス計画及び施設管理委員会から、博物館に旧工学部本館１～３階の一部の部屋の使用が認められました。また、青山熊治画伯の絵が保管されている４階第２会議室の管理を委ねられました。これを契機に博物館では、従来の博物館第１分館（旧工学部知能機械工場）での骨格、鉱物標本、考古資料の公開に加えて、平成２０年５月の開学記念日に合わせて講義室を展示室に改修し、大学が長年に亘り収集してきた学術標本並びに教育・研究を、九州大学のシンボル的建物である旧工学部本館を使って学内外に公開することを計画しています。

博物館の将来構想としては、キャンパス移転までは旧工学部本館を使用して展示を一般に公開し、キャンパス移転後は、展示設備・備品を新キャンパスに移設して展示することを計画しています。旧工学部本館が保存建物として保存されることになった場合には、引き続き箱崎地区で展示することも計画しています。

今後、博物館としては、全学規模の委員会において、博物館の将来構想を了承して貰うよう努力していきたいと考えています。また、箱崎地区の施設を利用して社会教育活動を行うことにより、学術標本を使った新たな研究、学際的な研究が始まると共に、九州大学の活動がより一層社会に見え易くなり、大学と社会との連携が増進することを期待します。

（総合研究博物館　館長）

## 着任の挨拶と研究紹介

丸 山 宗 利

この1月に昆虫学担当の助教として着任しました。出身は東京で、北海道大学で博士号を取得、それから、東京の国立科学博物館でポスドク（博士取得後の非常勤研究職）を経験したのち、昨年の12月までアメリカのシカゴにあるフィールド自然史博物館で同じくポスドクとして研究を続けていました。

子供のころから昆虫の研究者（当時の言葉では「虫博士」）になりたいと思っていました。今年、その夢がかなった形となりました。

さて、私の専門は「好蟻性昆虫（こうぎせい）」といいまして、ひらたく言えばアリの巣の中に居候している昆虫です。アリの巣のなかに昆虫がいると聞いてと驚かれる方も少なくないと思いますが、実際、昆虫を専門に研究している人にさえ、あまり知られていない昆虫の仲間です。しかし実は、好蟻性昆虫といわれるものには、世界で3000種以上、日本だけで少なくとも200種以上が知られています。また、珍しい生き物のような印象を持ちますが、そのようなことはなく、皆さんの住んでいる近所の林はもちろん、街中の公園でさえ、アリの巣さえあれば、ほとんど確実に好蟻性昆虫が見られます。

好蟻性昆虫は、昆虫のいろいろな仲間に知られていて、コオロギの仲間（アリヅカコオロギ）、チョウ（一部のシジミチョウ）、甲虫（ハネカクシなど）がその代表的なもので、それぞれにアリの巣に住む種が知られています。種によってアリとの関係はさまざまで、アリから口移しに餌をもらうものから、アリの巣の一部になりきって、アリの餌を盗み食いするもの、アリの幼虫に紛れて、その幼虫を食べてしまうものなどがあります。

昆虫の研究者でさえよく知らなかった仲間ですので、日本ではほとんど専門の研究者がいませんでした。私が研究をはじめたころ（約10年前）には、どこに出かけても、新しい発見ばかりで、面白い行動の観察をすることができたり、多くの新種を発見することができたりしました。

そこで私は、まず日本産の好蟻性昆虫の新種に名前をつけ（新種の発表）、多くの人が容易に研究できる環境作り（アリとの関係と分類の解説）を行ないました。好蟻性昆虫は、行動や生き物の進化を調べるうえで非常に有用な研究材料と考えられますので、こういった仕事はとても重要です。この研究については今後、「日本産好蟻性昆虫データベース」という、好蟻性昆虫に関するインターネットサイトを作成し、より多くの人たちが情報を得られるようにしたいと思っています。

図1. アリの巣にすむアリヅカコオロギの一種

図2. アリの行列を一緒に走るハネカクシの一種（赤い虫）

また一般に、アリの種ごとに違った種の好蟻性昆虫が居候することが知られています。アリの種の数というのは、暖かい地方へ行くほど多くなり、たとえば日本では300種弱のアリが知られていますが、マレーシアではその5倍以上の種数が報告されています。このことは、暖かい地方へ行くほど好蟻性昆虫の種数が多くなることを意味します。

日本の研究が一段落着いた後、私の興味は熱帯地方、特に東南アジアへも向きました。マレーシアを中心に、タイやインドネシアで調査を重ね、その数は10回以上に及んでいます。

それらの調査の結果でもっとも感激したのは、6新属、18新種ものハネカクシ科甲虫を1度に1つのアリの巣から採集したことです。そのアリは地下にすむもので、最近まで生態が知られておらず、ましてや居候する昆虫はほとんど未調査でした。この発見には本当に驚きましたが、その後も似たような経験を何度もすることができました。熱帯の森でアリの巣を探すたびに、新しい発見と興奮が待ち構えており、今では東南アジアが私の主な野外調査地となっています。今後は東南アジアの好蟻性昆虫の分類を進めながら、DNAの情報を使って、多数の種に分かれた仕組みや歴史などを解明していきたいと考えています。

世界に3000種以上といわれる好蟻性昆虫の大部分は、先ほどから述べているハネカクシの仲間です。しかしハネカクシ科というのは、分類の研究がたいへんに難しく、新しく見つ

けたものが、どこに所属するのか、本当に新種や新属なのか、知ることは容易でありません。

そのような問題をもっとも手っ取り早く解決するのは、研究された標本を検して、疑問に思う標本と見比べることです。しかし日本ではハネカクシを含む好蟻性昆虫の研究が進んでいなかったことから、標本の蓄積がほとんどなく、検すべき標本の大部分は欧米の博物館に収蔵されているのが現状です。

私は2006年の秋からアメリカへ渡り、最初に述べましたように、フィールド自然史博物館で研究を行ないました。その理由は単純で、世界から知られているハネカクシ科甲虫5万種（好蟻性種はその一部）のうち、約半数の種の標本が同博物館に揃っており、同時に世界を先導するハネカクシ研究者Alfred Newton博士とMargaret Thayer博士の夫妻が研究員として勤めているからでした。

この博物館で私のハネカクシの研究は飛躍的に進みましたし、Newton、Thayer両博士の温かいご指導に恵まれることもできましたが、同時に、海外の一流の博物館に滞在した経験は、何物にも代えがたいものでした。

フィールド自然史博物館は1863年にシカゴで行なわれた国際万博でその基盤が作られ、今に至っています。博物館の名前にはいくつかの変遷があり、「フィールド」の名前は博物館に多額の寄付をして設立に大きく寄与したMarshall Field氏（1834-1906）という富豪になんでいます。現在でも博物館の運営には市民の寄付が重要な財源となっています。

この博物館の収蔵規模は非常に大きく、アメリカにある博物館のなかでも、3位以内には含まれるそうです。収蔵品をあげればキリがありませんが、書籍の数だけで25万冊、最近840万ドルの巨費を投じて世界最大のティラノサウルスの化石を購入したことなどからも、その規模を窺い知ることができると思います。

展示ももちろん大きく、じっくり見ようとしたら、とても一日でまわることはできません。内容は分野ごとにさまざまなコンセプトで展示され、眺めて歩くだけで楽しく、さまざまな知識が得られるようになっています。

図3. フィールド自然史博物館

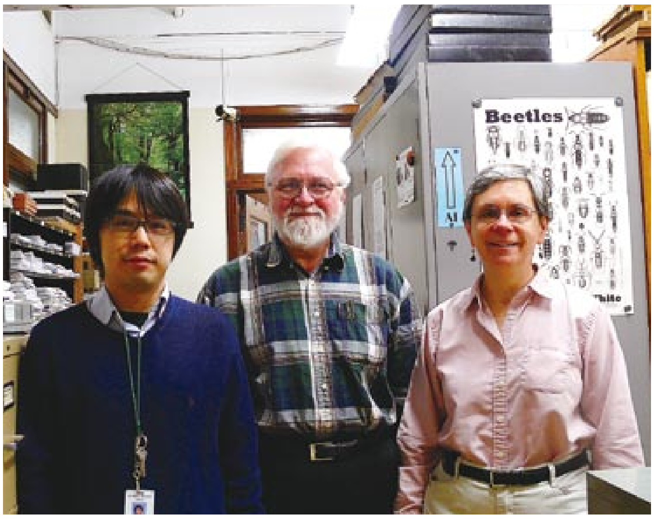



図4. 左から、丸山、Newton博士、Thayer博士

フィールド自然博物館はシカゴ市民にとって愛情の対象であり、同時に自慢の種でもあります。そういった市民によって博物館が支えられていると感じました。そのような点は、2000円以上もする入場料を惜しむことなく、繰り返し訪れる市民の姿からも感じ取れますが、多くのボランティアによって運営が成り立っていることからもわかりました。

「わが町の博物館が自慢」というのは、日本の感覚ではなかなかないことですし、市民交流を兼ねた積極的なボランティアの登用、その他、バリアフリーや教育システムなど、フィールド自然博物館での滞在で学ぶことは非常に多くありました。

もちろん、アメリカの大きな博物館のような半ば商業的な施設（といっても、お金にならない研究施設も並外れて充実しています）と、大学博物館を単純に比較することはできませんが、この経験はきっとこの博物館での運営でも役に立つであろうと思っています。

着任して間もなく、正直言って目標はまだ漠然としていますが、これから形作られていくこの九州大学総合研究博物館を前にして、自分が何をすべきか、慎重に考えて実行したいと思っています。また、この博物館は、収蔵や施設面などから、一昆虫研究者として非常に恵まれた職場に違いなく、その点で胸を張れるような研究をする必要も感じています。市民の皆様、大学と博物館関係者の皆様には、叱咤激励をいただければ幸いです。

（総合研究博物館　開示研究系）

## 平常展示「九州大学所蔵鉱山関連資料展」を開催

中 西 哲 也

平成19年12月1日より九州大学箱崎キャンパス50周年記念講堂2階ホワイエにおいて、「九州大学所蔵鉱山関連資料展」を開始しました。

日本は古来より鉱山の開発を行ってきました。古くは、対馬における銀の生産（674年、古事記）に始り、奈良の大仏の銅（8世紀〜、山口県長登銅山）、石見銀山（16世紀前半〜）のほか佐渡金山、生野銀山、別子銅山、足尾銅山、神岡鉱山など数多くの鉱山が開発され、日本の資本の蓄積と近代化に大きく貢献してきました。

本展示では、工学部列品室に収蔵されている、日本を代表する鉱山の鉱石（金、銀、銅、鉛、亜鉛など）や鉱山で使用した道具、総合研究博物館が所蔵する鉱山関連文書資料などを紹介しています。対馬の銀鉱石、長登の銅鉱石、石見銀山の銀鉱石も展示しています。是非ご覧下さい。

（総合研究博物館　分析技術開発系）

世界遺産石見銀山の銀鉱石「福石」

## アマミノクロウサギとアマミヤマシギの標本

丸 山 宗 利

南西諸島の奄美群島（鹿児島県）には数多くの固有の生物が生息することが知られています。そのなかでもとくに、アマミノクロウサギ（「奄美野黒兎」の意味）とアマミヤマシギ（「奄美山鴫」の意味）は、その希少性から、奄美群島を代表する生物といってもよいでしょう。それぞれ特別天然記念物と絶滅危惧種に指定されています。

今回、その両種の剥製と骨格標本が当館に収蔵されました。両種とも1頭の標本をもとに、剥製と骨格標本に仕上がりました。

アマミノクロウサギはメスの成獣で、2003年9月28日に奄美大島の瀬戸内町の中央林道で拾得されたものです。アマミヤマシギもメスの成鳥で、2007年2月6日に同じく奄美大島の笠利町屋仁集落と川上集落の間の県道上で死体が発見されました。

下記の解説にもあるとおり、両種とも人間の行いによって生息が脅かされていますが、今回の標本も交通事故によって死亡したことが、解剖と状況証拠によって明らかになっています。学術的に貴重な標本が当館に収蔵されたことは喜ばしいことですが、その原因を考えると複雑な思いがあります。

法によって保護された野生動物の標本ということで、当館への収蔵にあたっては多くの方のお手を煩わせました。尽力くださった阿部愼太郎さん（環境省）、鑪雅哉さん（環境省）、山田文雄さん（森林総合研究所）、ならびに毛利孝之さん（九州大学名誉教授）にはこの場を借りてお礼申し上げます。

（総合博物館　開示研究系）

### 解 説

**アマミノクロウサギ**

学名 *Pentalagus furnessi* (Stone, 1900)
哺乳綱ウサギ目ウサギ科アマミノクロウサギ属（一属一種）

アマミノクロウサギは、奄美諸島の奄美大島と徳之島の2島にのみ住んでいます。湿潤亜熱帯の森林に適応した生活を送るウサギで、ウサギ科では最も原始的な種とされており、特別天然記念物に指定されています。大きさは頭胴長40〜50cm 程度で、尾は短く長さ1〜2cmです。体重は2kg前後。耳が短く（4〜5cm）後肢も短い（9cm）ので、他のウサギと比較して跳躍能力に劣っています。体色は全体として茶色または黒茶色です。通常1頭で生活しており、昼間は巣穴に隠れており、夜になると巣を出て、植物の新芽、草、若木の樹皮などを食べます。巣穴を掘るのに適した長くて強大な爪を持っています。一般に1産1仔で、春と秋年2回の出産期があるといわれています。野犬や野生化したイエネコ、外来種マングースなどにより、アマミノクロウサギが捕食される事態が起きており、生息数の減少が心配されています。（農学研究院　飯田弘）

**アマミヤマシギ**

学名 *Scolopax mira* Hartert, 1916
鳥綱チドリ目シギ科ヤマシギ属

アマミヤマシギは奄美大島とその属島である加計呂麻島、ならびに徳之島に生息しており、最近では沖縄島からも記録されていますが、アマミノクロウサギと並んで奄美群島を代表する動物の一つです。同属で非常に良く似たヤマシギ*S. rusticola*がユーラシア大陸に広く分布するのに対し、本種の分布のたいへん狭い点は興味がもたれます。その特異性と近年の個体数の減少から、環境省の絶滅危惧種に指定されています。体の大きさは35〜37cmで、翼を広げた長さは18〜22cmです。全体に太った体形で、脚は短く頑強、地面での生活に適応しています。色彩は茶色と黒と黄色のまだら模様で、日中は薄暗い林床で地面に溶け込んでいます。夜になると活動を開始し、先が柔らかく感覚にすぐれたクチバシで落ち葉の間をさぐり、ミミズや昆虫を捕食します。その他の生活や行動については不明な点が多く、今後の調査が待たれます。アマミノクロウサギ同様、野生化した肉食哺乳類の存在は脅威で、また、夜になると林道に出て虫を探すことから、交通事故によって死亡することも多いようです。（総合研究博物館　丸山宗利）

# 九大病院カルテ資料

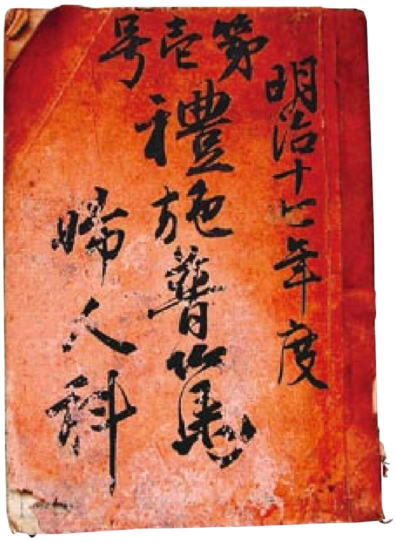
宮崎克則

九大病院地区の再開発にともない破棄される危機にあった昭和60年以前のカルテは、平成20年1月、旧看護師宿舎から箱崎地区の旧工学部4号館1、2F（780㎡）へ移され、管理は九大病院から総合研究博物館へ移管されました。

カルテの総数は、段ボール箱約8000箱、簿冊数にすると16万冊を超えます。明治36年に京都帝国大学福岡医科大学が設置される以前、県立福岡病院時代の明治10年代カルテも残っており、九州大学としてはこれらのカルテを破棄することなく、「人の記録」として保存・整理し、今後の研究に活用していく必要があります。旧帝大において、戦前期以来のカルテを保存している所はないようで、全国的にも貴重な資料といえます。

従来、カルテは病院の管理下にありましたが、外科・眼科など21の各科が個別に管理しており、全体としての整理はなされておらず、捨てられずに置かれていたのが実情でした。今後、これを整理して目録化し、研究資料としての活用方法を検討していきたいと思います。ただし、カルテは「個人」情報そのものであり、「個人情報保護」法など法的側面からの検討を行いつつ、活用方法を考えていく予定です。

（総合研究博物館　開示研究系）




左から2番目が水田祥代附属病院長、4番目が多田内修博物館長

# 寄贈標本

松 隈 明 彦

現生イモガイ類（軟体動物門腹足綱イモガイ科）２種
百崎義隆氏（総務部法令審議室）、２００８年１月寄贈。

１．ハデミナシ*Conus milneedwardsi* Jouseaume, 1894
現生標本５個体
(1) Shell height (SH) 153.7 mm, shell with an operculum, Tuticorin, Tamil Nadu, southern India (Gulf of Manaar), coll. by a troll boat, 50-70 m deep, 1 Jan. 2004; (2) SH 139.4 mm, shell with an operculum, Beira, Mozambique, outer reef, coll. by a diver, Jan. 2005; (3) SH 106.2 mm, shell with an operculum, Maput, Mozambique, 80-120 m deep; (4) SH 94.7 mm, empty shell, Maput, Mozambique, 80-120 m deep; (5) SH 93.1 mm, shell with an operculum, Banda Ache, Indonesia, within an atoll, coll. by a diver.

２．ベンガルイモガイ　*Conus bengalensis* (Okutani, 1968)
現生標本１個体（蓋付き）
SH 90.9 mm, shell with an operculum, northwest of Phuket, Thailand, 20-30 m deep, mud.

イモガイ類は、タカラガイ類と共に、形や色の美しさから愛好家の多い巻貝の一群です。中でも、今回寄贈されたハデミナシ（＝ハデイモガイ）、ベンガルイモガイはテント模様が著しく、テント模様が一層細かいウミノサカエイモガイと共に、コレクターの垂涎の的です。

属名の*Conus*は、ギリシャ語で松ぼっくりや円錐形（の物）を意味するκωνοσに由来します。和名のイモガイのイモは、ジャガイモやサツマイモではなく、頂上に同心円状に黒褐色の皮が付き、やや円錐形に近い形になるサトイモのことです。イモガイの１種にヤキイモガイという和名を提唱した人は、「イモガイの意味を知らない人」と陰口を叩かれました。タガヤサンミナシなど、イモガイ類の和名にしばしば見られる「ミナシ（身無し）」は、殻口が狭く、軟体部が少ないことから付けられた名前です。

ハデミナシの種小名*milneedwardsi*は、フランスの動物学者で、国立自然史博物館長Henri Milne-Edwards (1800-1885)に献名されたものです。西太平洋（沖縄）から東南アジア（インドネシア）、インド洋（ベンガル湾、アラビア海、モザンビーク、モーリシャス島）に分布します。大きなテント模様を持つこと、縫合と肩角間に１、体層側面に２又は３本の幅の広い螺状色帯を持つこと、及び高い螺塔を有することが特徴です。インド洋のものは特に螺塔が高く、テント模様や色帯が鮮やかです。喜界島の琉球石灰岩や沖縄本島周辺の浅海で採集されて、カワムラハデミナイ*Conus kawamurai* Habe, 1961と呼ばれている貝は、螺塔の低いハデミナシだと考えられています。

Figs. 1 and 2. *Conus milneedwardsi* Jouseaume, 1894. ハデミナシ、マナール湾、南インド(Tuticorin, Manaar Bay, southern India)。殻高(SH) 153.7 mm。

ベンガルイモガイ（＝ウミノミサカエ）は、水産庁の調査船照洋丸が、1958年2月にベンガル湾水深約50mの地点で採集した1個体に基づき、当時水産庁東海区水産研究所に勤務していた奥谷喬司博士（現日本貝類学会会長）によって新種記載された貝です。殻表面のテント模様は、ハデミナシとウミノサカエイモガイの中間の細かさで、螺状色帯は、縫合と肩角間に1本、体層側面に2本あります。近年、タイ国西岸プケット島北西のアンダマン海で操業する漁船のドレッジにより多くの標本が得られるようになりましたが、殻が欠けておらず、蓋の付いたものは極めて稀です。

（総合研究博物館　分析技術開発系）

Figs. 3 and 4. ハデミナシ*Conus milneedwardsi* Jouseaume, 1894。バンダアチェ、インドネシア (Banda Ache, Indonesia)。殻高(SH) 93.1 mm。

Figs. 5 and 6. ベンガルイモガイ*Conus bengalensis* (Okutani, 1968)。アンダマン海、プケット北西沖 (Andaman Sea, northwest off Puket, Thailand)。殻高(SH) 90.9 mm。

## 活動状況(展示・講演会関係)

### 特別展示

**平成19年12月1日〜**

九州大学箱崎キャンパス50周年記念講堂2階ホワイエにて「九州大学所蔵鉱山関連資料展」を開始しました。

### サテライト展示

**●福岡空港　第1ターミナル2階待合室**

**平成19年8月9日〜12月17日**
倭人伝の道と北部九州の古代文化Ⅳ
**平成19年12月17日〜**
倭人伝の道と北部九州の古代文化Ⅴ

**●前原市伊都文化会館**

**平成19年9月22日〜11月11日**
とる・つくる・そだてる −資源の保護と管理−
**平成19年11月11日〜平成20年1月13日**
とる・つくる・そだてる −作り育てる漁業−
**平成20年1月13日〜3月2日**
マリンバイオ −食べ物と健康に役立つ海の生き物−
**平成20年3月2日〜**
マリンバイオ −大きな可能性を秘める海の小さな生き物−

**●福岡市保健環境研究所「まもるーむ福岡」**

**平成19年6月19日〜**
植物をもっと知ろう III

**●志摩町総合保健福祉センター「ふれあい」**

**平成19年9月22日〜11月11日**
川の生命 −田で生活する生物−
**平成19年11月11日〜平成20年1月13日**
川の生命 −有明海だけで生活するエツってどんな魚−
**平成20年1月13日〜3月2日**
川の生命 −うなぎははるか外洋で産卵する−
**平成20年3月2日〜**
川の生命 −うなぎ仔魚の長い長い旅−

**●二丈町健康ふれあい施設「二丈温泉きららの湯」**

**平成19年9月22日〜11月11日**
海の生命 −九州近海に見られる温暖化−
**平成19年11月11日〜平成20年1月13日**
海の生命を守ろう −九州近海に見られる温暖化の影響−
**平成20年1月13日〜3月2日**
川の生命 −多様性をはぐくむワンド−
**平成20年3月2日〜**
川の生命 −田で生活する生物たちの危機−

### 公開講演会

**平成20年3月8日(土)**

平成19年度総合研究博物館公開講演会として、「鉱山遺跡を楽しもう」を九州大学箱崎キャンパス50周年記念講堂4階大会議室にて開催しました。入場者数　79名。


### P&P関連セミナー

**「九州大学博物館展示を利用した実践的研究」**
**〜アウトリーチ活動のあり方と、大人と子どもの関わりを促すツール開発〜**

**第3回セミナー(平成19年11月20日)**
**第4回セミナー(平成19年12月17日)**
**第5回セミナー(平成20年　3月25日)**
**第6回セミナー(平成20年　3月26日)**

## 活動状況(その他)

### 新規寄贈標本資料

**平成20年1月28日**
人文科学研究院考古学研究室所蔵考古資料(老朽化プレハブ2棟収蔵分)

**平成20年2月14日**
九大病院カルテ資料(約8,000箱)

**平成20年2月8日**
大塚勳氏の昆虫コレクション(約2400箱)

**平成20年2月7日**
農学研究院江頭和彦教授より、中国旧熱河省凌源県産ジュラ紀魚類化石1点(木製標本箱入り)

貴重な資料をご寄贈頂いた方々に厚く御礼申し上げます。

### 運営委員会

平成19年11月7日、平成19年12月18日(書面回議)
平成20年2月8日(書面回議)、平成20年2月25日(書面回議)
平成20年3月3日(書面回議)

### 職員の異動

○平成20年1月1日付で、丸山宗利氏が助教に就任しました。


九州大学総合研究博物館ニュース
*The Kyushu University Museum News*　No.10, March 2008

発行:九州大学総合研究博物館　〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1
TEL & FAX 092-642-4252　ホームページ http://www.museum.kyushu-u.ac.jp

印刷:城島印刷株式会社　〒810-0012 福岡市中央区白金2-9-6 TEL092-531-7102　FAX092-524-4411